

徳山地方の

幕末維新期に活躍した群像たち（その五）

―山崎隊を中心に（中編）―

会員 小林省三

はじめに

本誌第二六号で、幕末維新期に徳山藩内の中心的軍団の一つとして活躍した山崎隊について、その誕生の経緯と構成および四境戦争開戦前の合併事件について報告した。

本稿では調査が未だ十分ではないが、慶応二年の四境戦争開戦時から明治元年の鳥羽伏見戦争までの山崎隊を中心とした徳山藩諸隊の戦績を紹介する。

一、四境戦争

慶応元年（一八六五）九月二一日、朝廷は幕府の長州

再征を許し、同年一月七日には幕府は彦根藩以下三三藩に出兵を命じ、徳川茂承を征長先鋒総督とした。

長州藩では、慶応二年（一八六六）四月二一日藩主敬親が対幕応戦の部署として宍戸備前を小瀬川口、毛利伊賀を上ノ関、毛利常太郎を三田尻、毛利出雲・鈴尾五郎を小郡、毛利能登を船木、毛利豊之進を両大津、毛利宣次郎を萩、毛利讃岐を石州方面、御神本主殿を仏坂口、益田孫植を山代・徳地方面の各最高指揮役に任命し、二七日には黒印の軍令状を授けた。（註①）

四境戦争開戦前の四境各口の受持軍は、当時長州藩三兵教授役と軍政用掛を兼任し、四境戦争時に石州口総参

謀となった大村益次郎の自筆の史料によると次の通りであり、四境戦争開戦前の徳山藩軍の受持ちは徳山辺りであった。

史料1 (註②)

【大村益次郎史料】

雲州口

徳山辺

南園隊

四百人

徳山

第五大隊

四百人

宍戸

第四大隊

貳百人

三田尻

芸州口

右田

御楯隊

四百人

小郡口

第六大隊

四百人

八幡隊

第四大隊

貳百人

宇部辺

鈴尾

上ノ関より岩国之間

馬関口

岩国

長府

遊撃軍

奇兵隊

平尾

山口御守衛并ニ諸口列設

北浦

第一大隊 五百人

阿川

千石以上

萩 上北浦

吉敷

御神本

第四大隊

四境戦争芸州口では、慶応二年六月一三日夜の幕府軍の発砲により戦端が開かれた。本格的な戦闘が始まった。六月一四日には長州軍は、幕府軍の先鋒に大勝利した。

しかし六日後の同月一九日の大野追手戦争では、長州軍は大敗北した。その戦況の詳細は次の史料で知ることができる。

史料2 (註③)

【防長回天史】

(河瀬より政府員への書)

隊中兵士餘程疲れ且又病人少々有之旁に付今日より

両三日休息為仕候覚悟御座候昨日之戦争に付中隊司

令士原甲太郎飯田與之助玉井小式部岩影に伏し(中

略)

六月二十日

追啓若御多端にて別紙人數御差出不相成は卒伍之者
一圓隊中より世話可仕候間何分之御答片時も急奉待
候

(早川渡山口に使命の記事)

一遊撃隊早川渡出山之趣は過る十九日於大野に接戦
之節一番四番共大隊敗走致し遂に相引に相成残り
多く不堪憤懣候得共岩州よりも後陣之續後詰之兵
不足に付今暫く兵之出張致す迄進軍見合候て如何
哉と(後略)

このような戦況のため徳山藩からも銃隊一中隊(山崎
隊)が六月二〇日に芸州方面小瀬川口に派遣され、(註④)
六月二四日に着陣した。このことは次の史料で知ること
ができる。

史料3 (註⑤)

【藩史 卷之三】 御軍役御軍制文武諸隊之部

三小瀬川口御本家人数江援兵之事

一慶応二年丙寅六月廿日暮兵襲来、依之小瀬川口江
御本家人数被差出ニ付此御方江援兵として中隊

出兵被仰付、司令士三吉族季盈七月十三日引取

史料4 (註⑥)

【防長回天史】

(河瀬の報告) (六月二十五日)

(前略) 此度之戦争衝撃隊之働恐入候事に御座候尚
又四番大隊大に進戦岩国勢殊之外強進是は意外に御
座候昨日徳山より二小隊被差出候處迂翁に込り入候
岩国より諸事之心配監物様より御懇意の程奉恐入候
小瀬川口に六月二四日着陣した徳山藩銃隊一中隊
(山崎隊)は大野方面の作戦で活躍したと思われるが、
その詳細は不明である。また芸州口戦線での長州軍の死
者は八七人という記録があるが、徳山藩関係者は一人も
いない。(註⑦)

徳山藩銃隊一中隊は、史料⑤によれば七月一三日に帰
徳しているが、芸州口の長州軍本営は八月一二日に芸州
口に出動していた全軍に対して帰国を命じた。そして九
月二日、厳島の大願寺で幕府側代表勝安房守海舟と長州
側広沢兵助との間で停戦協定が成立した。

二、豊前出張

慶応三年（一八六七）二月二十七日山崎隊（総督森主水・軍監増野優太郎）は豊前小倉城の陣番のため出張を命ぜられ、三月一日に九州に渡海した。同年三月一二日には徳山藩世子毛利平六郎（元功）が渡海し調練場などを順覧した。その後小倉城陣番任務を完了し同年八月一〇日に帰徳した。このことは次の史料で知ることができる。

史料5（註⑧）

【藩史 卷之三】 御軍役御軍制文武諸隊之部

四豊前小倉城陣番之事

一慶応三年丁卯二月廿七日豊前国小倉城陣番として
山崎隊出張被仰付、惣督森主水蕃仲八月十日引取

史料6（註⑨）

【奇兵隊日記】

毛利元功

○慶応三年三月朔日 曇天

一徳山山崎隊小倉へ渡海

○慶応三年三月十二日 晴

一徳山世子君昨日御渡海之由にて、今朝当本陣へ御出、銃陣場等御順覧、内裡へ御通行被成候付、久我四郎罷越候事

三、鳥羽伏見戦争

(1) 鳥羽伏見戦争開戦前

長州藩は禁門の変後入京を禁じられていたが、慶応三年一二月八日許されてその先頭兵団二中隊が先ず入京し、その後六中隊が増強され在京軍八中隊（六六三人）となり、同月一八日には長州藩全軍は京都東山の東福寺に滞陣した。同月二〇日、長州藩諸隊では編成替えが行なわれ、奇兵隊を第一中隊、遊撃隊を第二中隊、整武隊を第三中隊、鋭武隊を第四中隊、振武隊を第五中隊、第二奇兵隊を第六中隊、右田隊を第七中隊、膺懲隊を第八中隊と称した。

徳山藩では一一月末日に世子毛利平六郎（元功）が山崎隊二中隊及び徳山第一大隊（足軽・中間で編成）二中隊（合計四五三人）（参謀遠藤貞一郎・大野直輔）を率い

富海に集結し、一二月八日岩国藩日進隊(名代宮庄主水)

と共に富海港より乗船し、同日尾道に着船し上陸した。

その後、長州兵入京許可の報を受けて一二月一五日には、毛利平六郎(元功)率いる山崎隊・徳山第一大隊と岩国藩日進隊は尾道港を出港し、同月一六日に兵庫に至り、同月一八日には西宮に上陸し、進軍して同月一九日には入京し、粟生の光明寺に滞陣した。その後、同月二六日には、毛利平六郎(元功)は宮庄主水といっしょに参内した。このことは次の史料で知ることができる。

史料7(註⑩)

【伏見戦闘記】

一毛利平六郎様岩国御名代慶応三年十一月晦日富海へ相揃、十二月八日同港御出帆被成、一応尾の道へ御入港上國形勢探索時機ニ寄り西の宮御揚陸被成筈之事

一徳山御守衛半大隊被召連候事

一岩国名代守衛二中隊陪従之事

久保無二藏

右徳山岩国兵隊駈引トして付添被仰付候事

十二月十五日石部禄郎西ノ宮駅ニ往キ、平六公子近日

來營アラント予備ヲ為ス

十八日薄晩國貞直人ヨリ報シ來ル、今日平六公子西宮

駅發途アリト

十九日平六公子入京ス、光明寺へ營セラルニ付前軍ハ

悉ク転シテ東福寺ニ營ス、振武隊輜重ヲ護シテ先發

ス、朝餐後ヨリ諸隊順次ニ転陣ス、夜五時悉ク至ル、

平公子ハ七ツ半時至リ駐營アリ

二十日徳山公子以下入京ヲ申ス(以下中路)

二十四日平六郎君及ヒ宮庄主水カ参朝ヲ伺フ

淡路名代毛利平六郎、監物名代宮庄主水参朝之儀、

此間御伺申上候処如何被仰付候哉、何分之御沙汰被

成遣候様奉願候

右附箋御指令

明廿五日廿九日兩日之外勝手ニ可伺天氣候事、但

今日にても宜敷候

佐々木次郎四郎

平六公子林光院へ微行アリ

(2) 戦鬪第一日(一月三日)

旧幕軍(註⑩)は慶応四年(一八六八)一月二日、大坂より京師に向かつて北上を開始した。旧幕軍伏見到着という情報で、朝廷は俄に戦備を厳にするため一月三日朝、薩・長・土の諸藩に伏見の厳守を命じた。長州藩兵は、歩兵二中隊が展開して守備についた。

鳥羽方面の守備についていた薩摩藩兵は、旧幕軍の前進開始を見るや否や轟然と砲火を開き、続いて小銃を一斉に発射した。これが開戦の第一発で、時刻は午後五時頃であった。鳥羽方面の銃声を聞くや否や、伏見方面でも直ちに薩砲九門の初弾が伏見奉行所に打ち込まれ、戦鬪を開始した。そして夜の一二時頃には長州藩の宮田艇身隊が真先に伏見奉行所に突入し、また同じ頃に薩州兵も東から伏見奉行所に突入し、放火した。夜半には伏見方面の旧幕軍は、西に向け退却した。

鳥羽方面でも旧幕軍は、官軍の攻撃により徐々に後退

して下鳥羽の俵台場に陣を構えた。そして、その夜は一晚中両軍による小鬪が繰り返された。

このような状況下、当日一月三日に徳山藩病院付医師であった福島男也は介者と人夫の三人で西宮から粟生の光明寺に向かつていたが、不幸にもその道中で鳥羽伏見方面から官軍に破れ退却中であつた旧幕軍一連隊の兵に発見された。その折、同行中の介者と人夫は脱走したが、福島男也は旧幕軍兵と争論となり逮捕され、そして斬首された。その遺骸は、一月六日の官軍による八幡橋本方面占領後に同地で発見され、東福寺に埋葬された。このことは次の史料により知ることができる。

史料 8 (註⑫)

【上国戦鬪報知録】

徳山政府各中様

(前略) 福島男也病院介者人夫已上三人二而西ノ宮
と粟生光明寺江罷越候途中、山崎ニ而賊兵十一聯隊
ト申落兵ニ被逐、介者人夫ハ脱走、男也耆人及争論
候哉之趣ニ而終ニ賊兵ニ被捕候上断頭之由、遺骸ハ

橋本砲台も落候上ニ而相知候二付、山崎ニ而來鳴又兵衛墳墓之近辺ニ埋葬候事蓋正月三日之事ニ御座候

(3) 戦闘第二日（一月四日）

錦旗の出現

この日は、早朝より両軍により鳥羽と伏見で戦闘が繰り広げられ、旧幕軍は昼頃までは善戦したが、伏見を奪還することができず午後二時近く全軍退却を開始した。

そして旧幕軍は劣勢を挽回するため淀城に入り抗戦し、大坂よりの援軍を待とうとしたが、淀城は入城を拒否した。その後、やむなく旧幕軍は富ノ森陣地へと退却した。

そこで、官軍は旧幕軍の富ノ森陣地をを二時間余にわたり攻撃したが、遂にその目的を果たせずまた日没となったので攻撃を中止した。

この日は旧幕軍もよく戦ったので官軍は頗る苦戦した。同日徳山藩二小隊（山崎隊）も長州藩第五中隊（第二奇兵隊）と共に高瀬川堤に進撃したという。

また、朝廷ではこの日仁和寺宮嘉彰親王を征討大將軍に任命し、古例によって錦旗、節刀を下賜した。

(4) 戦闘第三日（一月五日）

富ノ森・淀城の戦闘

この日の官軍の攻撃計画に従い、徳山藩二小隊（山崎隊）は桂川右岸支隊に属し、午前七時頃下鳥羽を出発し、赤池から桂川の右岸に渡った。更に進んで富ノ森の対岸に達した。また鳥羽本道攻撃隊は午後二時頃には旧幕軍の富ノ森陣地を攻略し、納所陣地も乗っ取った。ここで千両松付近の戦闘を制した伏見本道攻撃軍や午後三時頃には桂川下流を渡河した桂川右岸支隊など全官軍は合同作戦に転じ、淀城に迫り遂に開城させた。このことは次の史料により知ることができる。

史料9（註⑬）

【伏見戦闘記】

（前略）

正月五日（中略）第八小队徳山兵二小队岩国兵一小

隊ト共二桂川ノ下流ヲ涉リ来リ戦フ、八半時淀城遂
ニ陥ル（後略）

またこの日の朝、仁和寺宮は錦旗を翻して東寺の本營
を御出発され、富ノ森から淀小橋迄お進みになった。

(5) 戦鬪第四日（一月六日）

八幡・橋本の戦鬪

八幡・橋本付近は、生駒山脈の一分脈が北走して京都
平野と大阪平野とを両分する狭隘口である。この日橋本
宿と楠葉の橋本砲台で反撃を試みようとしていた旧幕軍
に対し、官軍は鳥羽・伏見口兩軍が合同して布陣した。

官軍諸隊は六日早朝から十津川を渡り、全軍は午前八
時頃には渡河を終わり攻撃前進に移った。午前一一時頃、
津藩（藤堂、三二万余石）の兵千余人が突然側面から旧
幕軍に対して射撃を開始した。この津藩の裏切りは旧幕
軍を大混乱に陥れ旧幕軍は甚大な痛手を被った。この津
藩裏切り事件は、一月五日朝廷から勅使として津藩兵説
諭のためさしむけられた大夫四条隆平が、逡巡する津藩

士等を鞭撻して帰順を迫り、承服させたことにより發生
した。その折勅使を追って徳山藩世子毛利平六郎（元功）
は初めて兵を率い出馬して津藩の軍營にいき、「若し津藩
が旧幕軍に発砲することが忍びない場合は、暫く砲を借
り、徳山兵が砲を操作して、幕軍を砲撃したい」と申し
出たので津軍は協議の末帰順に踏み切ったという。また
徳山二小隊と岩国藩一小隊は、同月六日朝、淀川を舟渡
して山崎に入り、津藩兵と協力して旧幕軍を横撃した。
同日出撃し活躍した徳山藩兵は、第一中隊二番小隊（山
崎隊参謀・書記、有福次郎）と第三中隊二番小隊（庄原
確乎）などである。

旧幕軍は橋本から八キロの枚方に退却したが、敗軍の
余勢で枚方にも止陣できず、全軍守口と大坂に退走して
しまった。

この日の戦鬪で薩兵は戦死六、負傷二六、長兵は支藩
あわせて戦死一、負傷一四、津兵は戦死一、負傷九を出
した。この日の徳山藩兵の戦死者と負傷者は、第一中隊
負傷者、栗屋三郎・横山新之丞・岩本亀之丞・山本栄蔵

の四人、第二中隊戦死一人、深手一人、第三中隊負傷者、福谷作衛門となっている。このことは次の史料で知ることがができる。

史料(10) (註⑭)

【上国戦闘報知録】

(前文欠) 第一中隊二番小隊有福次郎光明寺操出、橋本攻拔之機二至、山崎之渡を砲台へ登り第三中隊式番小隊庄原確乎高浜砲台へ相加候、第一中隊一番小隊第三中隊不残御供二而光明寺御帰陣之事、其実君公様ニハ昨夜御帰陣相成候事、第一中隊二番小隊第二中隊八円妙寺村へ休憩之事、此日死傷左之通り、第一中隊蒙創栗屋三郎横山新之丞岩本龜之丞山本栄蔵、第二中隊戦死兎人深手兎人第三中隊福谷作衛門被創之分ハ何れも薄浅之事ニ候、夫々早速御届相成候 (後略)

(6) 戦闘終了

一月六日の八幡・橋本の戦闘をもって鳥羽伏見戦争は

実質的に終了し、その後は戦闘らしき戦闘はなく、大坂攻略となった。

そのような状況下で、徳山藩世子毛利平六郎(元功)は、一月七日には京都河原町の長州藩邸に転陣した。そして配下の第三中隊は、長州藩第七中隊(右田隊)と交代して蛤御門の守衛についた。また同日円妙寺で休憩した徳山一小隊(山崎隊)は広瀬村に転進し、八日には佐々木次郎四郎の指揮下に入った。

徳川慶喜は、一月六日午後一〇時頃秘かに大坂城を脱出した。八日夜には旧幕軍艦開陽で東航し、一日品川に着港、一二日未明に上陸して江戸城に帰城した。

一月八日夜には、佐々木次郎四郎指揮下の徳山一小隊(山崎隊)と岩国一小隊の合併中隊は、淀川を舟下して守口に達し、翌九日早朝大坂に入った。ついで佐々木隊は直ちに大坂城に入城し、占領した。このことは次の史料で知ることができる。

史料(11) (註⑮)

【上国戦闘報知録】

(前略) 翌七日世子公京師河原町之御本家屋敷内へ

御転陣ニ付、第一中隊一番小隊第三中隊御守衛罷登候、第三中隊ハ直様蛤御門へ相詰候、同日円妙寺休憩之兵隊ハ不残広瀬村へ転進、夫々逐々大坂江相向候由、(後略)

史料(12) (註⑬)

【伏見戦闘記】

(前略)

九日佐々木次郎四郎徳山岩国兵隊率ひ、昨日淀川ニ航シ下り今朝華城へ進入ス(後略)

かくして大坂攻略を達成し、鳥羽伏見戦争は官軍の勝利するところとなった。

おわりに

本稿は、『徳山地方郷土史研究』第二六号に研究報告として投稿した「徳山地方の幕末維新时期に活躍した群像たち(その四)」の続稿の一部である。与えられた紙幅の関係で本号にも投稿できなかつた残稿については次号に投

稿する。

本稿では、不十分ながら四境戦争から鳥羽伏見戦争期迄の徳山藩兵(山崎隊中心)活躍について、一、四境戦争に出陣した山崎隊の活躍についての不明確さ(戦死・戦傷者の記録なし)、二、鳥羽伏見戦争での徳山藩病院付医師福島男也の戦死事件の実情、三、鳥羽伏見戦後の大坂城最初の入城軍は徳山藩山崎隊などであったことなどを解明できた。次号には、蝦夷戦争(箱館戦争)や脱退事件における山崎隊の戦歴と明治元年八月五日に御家中苗字持以上で結成され、蝦夷戦争以降山崎隊と共に徳山藩の中心的軍団として活躍した献功隊について調査検討した結果を投稿したい。また、機会があれば前号から投稿している山崎隊を中心とした調査結果を徳山地方郷土史研究会の例会で研究発表したい。

今後徳山地方の歴史について新しい視点でもって調査検討を進めていきたい。

註

- ① 山口県編集
『防長歴史曆 上』三二一〜三二三頁
- ② 内田 伸編
『大村益次郎史料』二九六〜二九七頁
- ③ 末松謙澄著
『防長回天史第五編中』
(柏書房、一九六七年)一〇〇〇頁
- ④ 『新南陽市史』六六一頁には、「山崎隊の戦歴は、慶応二年の四境戦争に一中隊が芸州口の亀尾川に出陣し」とある。本記述の一次史料は不明。
- ⑤ 徳山市史編纂委員会編
『徳山市史史料 上』 五六〇頁
- ⑥ 末松謙澄著
『防長回天史第五編中』 一〇〇一頁
- ⑦ 明田鉄男編
『幕末維新全殉難者名鑑 二』
一七〜二六頁
- ⑧ 徳山市史編纂委員会編
『徳山市史史料 上』 五六〇頁
- ⑨ 『徳山地方郷土史研究』第二三号 三八頁
- ⑩ 徳山市史編纂委員会編
『徳山市史史料 中』 一七五頁
- ⑪ 徳川幕府は、慶応三年(一八六七)一〇月一日、一五代將軍慶喜が將軍職を辞退して大政奉還することで崩壊した。
- ⑫ 徳山市史編纂委員会編
『徳山市史史料 中』 一七七頁
- ⑬ 右⑫に同じ 一七六頁
- ⑭ 右⑫に同じ 一七六頁
- ⑮ 右⑫に同じ 一七六頁
- ⑯ 右⑫に同じ 一七六頁
- 付記 本稿作成にあたり、多くの啓蒙書籍の恩恵を受けているが、それらについては注記していない。